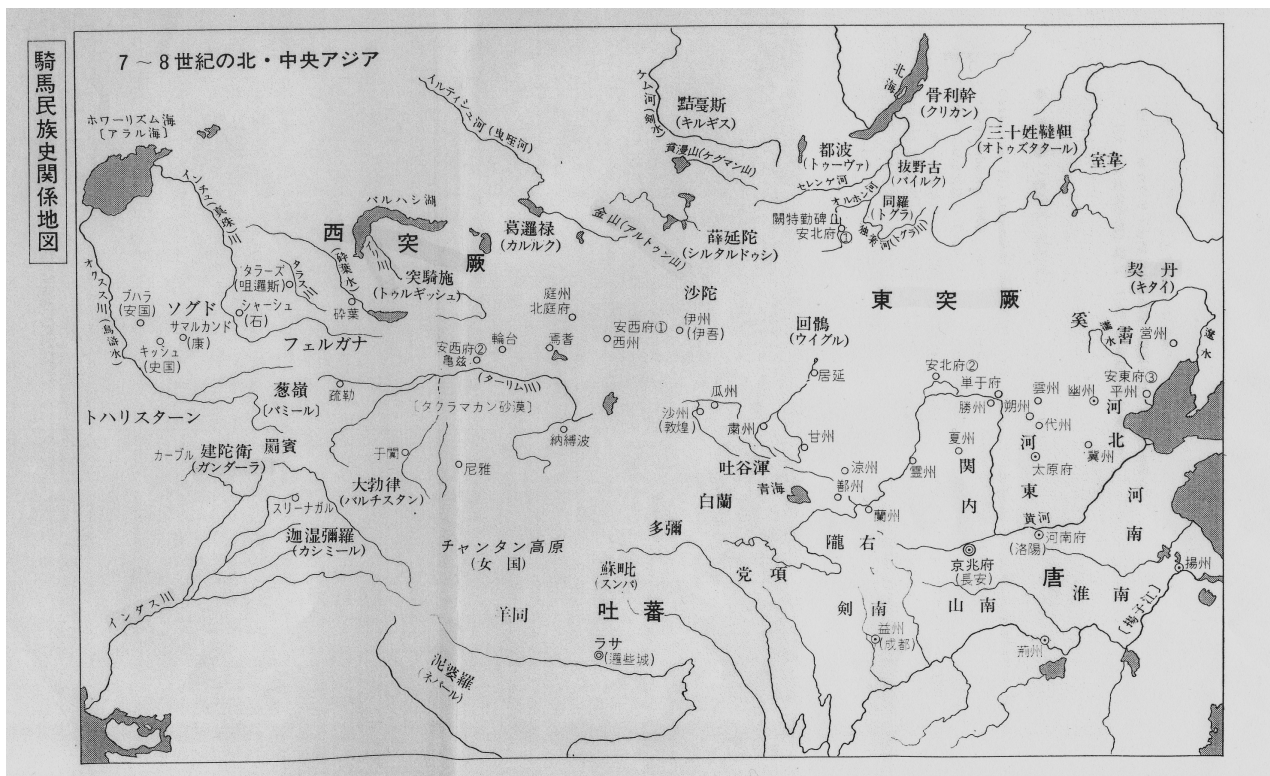


1 はじめに

岡山県には古代において強大な政権が存在していた。「吉備国」である。吉備氏の始祖伝承は古事記、日本書紀に記録されている。その記述量は地方豪族の中では突出している。しかし、吉備国の語源については明確になっていない。その理由は、文献史料として『古事記』、『日本書紀』、『続日本記』のみを使用しているからである。

吉備国の最古の記録は、推古 30 年（622）成立の『^{せんだい きくじほん きたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二巻本』である。吉備は「黄蕨」「黄蕨津彦神」と記録されている。『黄蕨』は古代地名であり漢音は「コウケツ」である。地名学より^{こうけつ}黄蕨国の蕨は突厥国からの渡来者を意味している。

突厥国を調査して羈縻（きび）を知った。羈縻とは「羈：午の手綱、縻：牛の鼻綱」を意味している。つまり、「手綱・鼻綱で周辺諸国を中国から離反しないように繋ぎ止めておく」古代中国の^{こうけつ}間接支配の方法である。地名学による調査研究内容を報告したい。



『東洋文庫 223 騎馬民族史 2 正史北狄（ホクテキ）伝』 昭和 47 年 平凡社より

2 弥生時代の黄蕨国

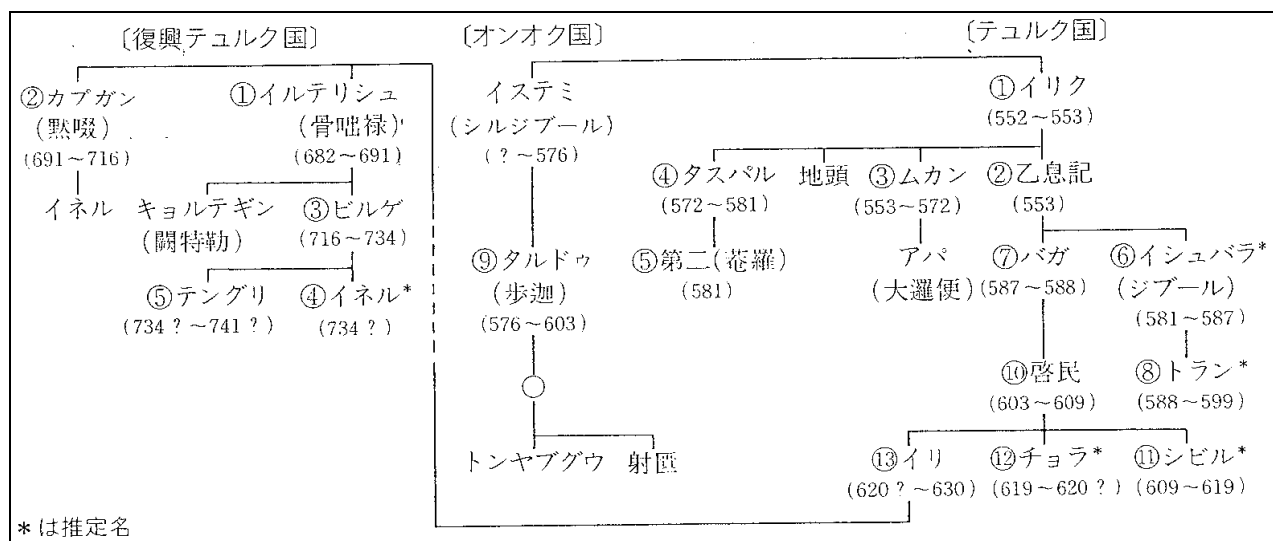
弥生時代中期の紀元前 1 世紀ごろ、日本列島（倭国）は百余国に分かれていた。紀元後 1 世紀後半には、「倭国乱れ、相攻伐すること暦年」とされている。高島村のある旭東平野に人々が暮らし始めたのは縄文時代である。弥生時代になると多くのムラができて雄町遺跡のような大きなムラも見られる。弥生時代とは水稻栽培を中心とする生産経済の本格化と共に、^{こうけつ}金属器の使用という大革命の時代であり百間川沢田遺跡（多くの土器・炉床・貯

蔵穴を発見)、百間川原尾島遺跡の時代である。

注目すべきは「高島村古跡略図」のハガという地名である。テュルク（突厥）の名は 530～540 年代には中国人に知られ、突厥国成立は 552 年。随への侵入は 582 年である。

『テュルクのカガン系譜』に、①イリク（552～553）⇒②乙息記（553）⇒バガ（587～588）とあり、ハガという地名はバガ縁の渡来人と考えられる。

「テュルクのカガン系譜」の中の 5 人の名前と、岡山県内の地名が一致している事実を発見した。突厥国の東西分裂は 583 年である。分裂による混乱により黄蕨国へ渡来したと考えた。



「テュルクのカガン系譜」

『世界の歴史⑩ 草原とオアシス』収録 山田信夫 昭和 60 年 講談社

2.1 ハガ遺跡と羊形硯^{ようけいけん}

ハガ遺跡は岡山平野の中央部に位置している。岡山三大河川の一つである旭川の東岸平野の北半になる。『ハガ(高島小プール)遺跡発掘調査現地説明会資料』には「遺構面は 4 面で、最も古いのは 7 世紀の遺構面で、比較的小さな柱穴と溝が検出された。」と報告されている。ハガ遺跡から出土した羊形硯^{ようけいけん}は頭の部分のみの破片である。羊をかたどった焼き物の硯(岡山市埋蔵文化財センター所蔵)である。



其風俗不淫男子皆露形以
木絲招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人復
髮密紒作衣如單被穿其中央實頭衣之種未結
紒麻絲系結縷出細紒縷其地無牛馬虎豹羊
諸兵用矛楯木弓木矛短下長上竹箭或鐵箭或
骨鏃所有無與隣耳朱崖同

の硯(岡山市埋蔵文化財センター所蔵)である。突厥国からの渡来人縁の焼き物である。魏志倭人伝に「その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵠なし」と記録されている。

魏志倭人伝とは中国の正史『三国志』中の「魏書」(全 30 卷)に書かれている東夷伝倭人条の略称である。正式には『三国志』魏書東夷伝倭人条である。全文で 1988 (又は 2008) 文字から成立している。著者は西晋の陳寿であり 3 世紀末(280～290 年頃)に書かれたものである。他にも三彩陶器等、奈良の都に遜色ないものが多数発掘されているハガ遺跡は岡山平野の中央部に位置している。

3 突厥国の人名「中国の正史（二十四史）突厥伝 622 年以前調査」と岡山県地名の比較
突厥伝（周書・随書・北史・旧唐書・新唐書）

突厥国の人名地名	岡山県の地名	説明
可汗（カガン）可汗とは君主号。	汗入（あせり）	岡山市南区妹尾に汗入 伯耆国（鳥取県）六郡に汗入郡 （鳥取県西伯郡の古名が汗入郡）
突厥国バルハシ湖へイリ川 中国新疆ウイグル自治区の北 部イリ・カザフ自治州からカザ フスタン南西部のアルマトイ 州にかけて流れるイリ川。 伊利可汗（イリグカガン、土門、 ブミンカガン）（552～553） 柔然から独立し突厥可汗国を 開く。 頡利可汗（イリカガン、咄苾） （620～630）啓民可汗の三男。 唐に降伏し東突厥は一時滅ぶ。	伊里川 伊里（いり）	伊里川（熊山より備前市伊里へ） 備前市伊里
地頭（イリクの子）	地頭片山（じとう） 地頭（じとう） 智頭（ちづ） 地頭下（じとう） 地頭上（じとう）	総社市地頭片山（古墳・地頭に 21 基） 高梁市川上町地頭（大杉塚古墳） 鳥取県八頭郡智頭町（智頭枕田遺跡） 浅口市金光町地頭下（地頭の居館説） 浅口市鴨方町地頭上（地頭の居館説）
バガ可汗（587～588） （乙息記の子）	ハガ遺跡（高島小） 芳賀（はが） 埴和（はが）	岡山市中区国府市場（羊形硯出土） 岡山市北区芳賀 （飯盛山古墳・打越塚古墳） 久米郡美咲町大埴和 埴和（埴和・埴賀・羽賀・方賀・芳賀）
阿波可汗（大邏便、アパカガン） （581～587）（木杆可汗の子）	阿波村（あば）	津山市阿波（あば） 古代の「タタラ吹き製鉄」鉄穴内、 金屋寺、福籠、金山、タタラ谷との 製鉄地名。
鉄勒（テツロク） （突厥以外のトルコ人の総称）	鉄（くろがね） 鉄山（かねやま）	岡山市東区鉄 真庭市鉄山
金山（アルタイ山脈） 金山（アルタイ山脈）は形が兜 に似ていた。兜を突厥と言っ た。	金山（かなやま） 金山寺 弓削金山 金山屋敷遺跡	岡山市北区御津（御津郡御津町） 岡山市北区金山寺 岡山市東区瀬戸町弓削小字金山（銅） 英田郡西栗倉村大字影石

	金山彦命 金山彦命 金山彦大神 金山彦命	中山神社（津山市一宮） 吉備津神社末社一童社 吉備津彦神社（岡山市北区一宮） 金彦神社（備前市吉永町金谷）
--	-------------------------------	--

3.1 突厥国

6世紀～8世紀半ばにモンゴル高原から中央アジアにかけての地域を支配したテュルク系（トルコ系）遊牧騎馬民族とその国家。突厥という言葉自体がテュルクの音写表記。独自のソグド文字をもっていた。その**首長は可汗（カガン）**とよばれた。アルタイ山脈の麓に住んでいた。当初はモンゴル高原に勢力を伸ばした柔然に従属していて、鉱業に従事していた。6世紀中頃から徐々に勢力を強め、有力氏族であった阿史那氏の族長土門（ブミン）は同じテュルク系である**鉄勒**諸部族を服属させると552年柔然の敕連頭兵伐可汗（阿那瓌）を破って独立した。土門は即位して、**伊利（イリク）可汗**となった。その後三代木杆可汗はモンゴル高原の柔然を滅ぼし、契丹を討ち、**キルギス**を併せ、ササン朝ペルシャと結んで隣接するエフタルを滅ぼし、大勢力を築き上げた。その領土はモンゴル高原からカスピ海北岸のキプチャク草原に至り、ソグド人などの定住民が居住する中央アジアのオアシス地帯までも支配する大帝国を築き、その支配のもとで中央ユーラシア全域に及ぶテュルク世界の原型が形作られた。その後、隋の離間策によって東西に分裂した。

4 備前市伊里川と突厥国のイリ川

熊山より備前市伊里へ**伊里川**が流れ、**突厥国バルハシ湖**へ**イリ川**が流れこんでいる。



突厥国イリ川



熊山の近くに弓削**金山**がある。**突厥**とは**金山**（アルタイ山脈）の形が兜に似ていたの
で、兜を**突厥**と言った。**突厥**国金山の南麓
で柔然の支配下にあったトルコ部族の阿史
那氏は、遊牧民には珍しい鍛鉄技術で実力
を伸ばし、552年に独立して突厥（トルコ）
と称した。トルコ系民族の遠祖である。552
年は現在のトルコ共和国でも民族史上の建
国の年とされている。

5 突厥国（トルコ系遊牧民）の鍛鉄技術

突厥国は鍛鉄技術で勢力を拡大した。鍛鉄とは鉄をきたえること。きたえた鉄を意味している。備前刀作刀の基礎技術である。

バルハシ湖はソ連カザフ共和国の東南部に位置し、表面積は四国ほどでテンシャン山脈の雪解け水がイリ川などの7つの河川によって流入する。流出する河川は一つもなく閉塞湖である。ウズンアラル海峡を境として、湖の西部は淡水、東部は塩水である。11～4月中旬の間は氷結する。イリ川は、中国新疆ウイグル自治区の北部のイリ・カザフ自治州からカザフスタン南西部のアルマトイ州にかけて流れる川である。長さ1439kmのうち815kmがカザフスタンを流れる。天山山脈に源を発し西に流れバルハシ湖に注ぐ。河口には巨大な三角州がある。流域のイリ地方では烏孫、チャガタイ・ハン国、ジュンガルといった遊牧国家が興亡した。

イリ・カザフ自治州は中華人民共和国新疆ウイグル自治区北部に位置するカザフ族の副省級自治州。グルジャ（伊寧）市を州都とし、全国で唯一、タルバガタイ（塔城）、アルタイ（阿勒泰）の2地区を管轄する地区級行政単位である。唐代には突厥旧属カルルク部の地であり、後にカラハン王朝の領土となった。1124年、契丹貴族耶律大石がイリのカルルク部を臣服させて西遼を樹立した。1211年カルルク部はモンゴル帝国の支配下に入り、チャガタイ・ハン国に分封された。

5.1 鉄勒と鉄（岡山市東区鉄）

トルコ系諸民族を統一した突厥国ができたため、当時の中国人は、突厥以外のトルコ人を総称し「鉄勒（てつろく）」と呼んでいた。同じトルコ系であっても、王家と被支配諸部族を区別していた。「鉄勒」と呼ばれたトルコ系部族の中には、アルタイ山脈を拠点にした鉄鍛冶を特技とする部族がいた。「鉄」という文字は鉄勒に由来している。

アルタイ山脈は中国・カザフスタン・ロシア・モンゴルの国境にまたがる約2000kmにわたる山脈である。「アルタイ」の語源はトルコ・モンゴル語の「金（アルトゥン）」に由来している。中国では今でもアルタイを「金山」と呼んでいる。

アルタイ山脈に標高7435mの「托木爾（トムール）峰」が含まれる。「トムール」とはウイグル語で「鉄山」の意味である。「金山」と呼ばれるアルタイ山脈は、金、鉄をはじめとする鉱物資源が豊富なことで知られている。

突厥の首長であった「阿史那（あしな）氏」は、首長であると同時に呪術師でもあった。当時、金銀より貴重であった鉄の兜を用意させ、それをかぶり巫術を行った。突厥はモンゴル系「柔然（じゅうぜん）」の支配下であり、トルコ系「突厥」の役割は鉄工であった。柔然に仕える鉄工の突厥が反旗を翻し、柔然に代わって6世紀半ばから約200年間、途中、東西の分裂や唐による被支配時代を経験し、一大遊牧国家を形成し維持できたのは、「鉄の技術力」によるものである。『鉄の力』を握るものが世界を制した。鉄を自由に扱える技術を持つということは、現在の核兵器を持つことと同義である。「製鉄技術」は、世界を制することができる秘伝中の秘伝であった。製鉄技術は特定の部族によって門外不出のワザとして継承された。

岡山市東区鉄の近くに、西祖山方前遺跡(岡山市東区西祖)がある。黄蕨国における初期段階 6 世紀後半頃の鉋石製鉄の製鉄炉が発見されている。突厥国の東西分裂は 583 年である。突厥国は鍛鉄技術で勢力を拡大した。分裂による混乱により黄蕨国へ渡来した。時代が符合している。

5.2 「鉄は力なり」

部族の奪い合い、産鉄技術を持つ民をいかに自己の支配下に組み込み、その技術力を手にするか。突蕨国は、騎馬民族の興亡の陰に、数々の支配者によって翻弄され数奇な運命をたどった、鉄工とされた突厥国は様々なトルコ系連合である。製鉄の技術に長けていたのは被支配者となっていた「鉄勒」の中の特定部族である。世界を制する製鉄の技術をもつ民が、逆に支配され時の支配者によって利用されていた。突蕨国は、これを記憶しており、鉄に関する伝統を強く継承している。日本刀を鍛錬する際、刀鍛冶が白装束に身を包み、精進潔斎した後、聖水によって鉄を打つ光景を思い浮かべれば納得できる。

中央アジアでも製鉄に携わったのは、野卑な職人でも荒々しい武人でもなく、神官かそれに近い存在であった。騎馬民族の鍛冶師尊重の伝統、突厥の鉄に対する宗教的な行為は、こうした事情が関係している。

6 突厥国と古代中国

6.1 古代中国の羈縻

日本の古代史を、東アジア史の一環として捕らえようとする試みは戦後さかんになってきている。東アジアとの関係を見無視しては歴史学の体をなさない。

① 羈縻（きび）とは、中国王朝による周辺の異民族への統御政策の呼称である。漢王朝が異民族に対して何らかの積極的な関係を結ぼうとした時には、全て羈縻と言った。漢の時代に始まり、唐の時代に最も巧みに利用された。周辺の異民族・諸国家に対し政治的・軍事的・文化的に従属関係をつくりあげた。

② 冊封（さくほう）とは周辺民族・国家の首長に唐の官爵を与え、中国王朝の支配秩序に組み込むことである。中国に近い友好的な国王・酋長を選び、都督・刺史・県令に任じ、彼らの統治権を唐の政治構造における官吏として行使させた。

③ 羈縻が先で、冊封は後である。

④ 朝貢（ちょうこう）とは、中国の皇帝に対して周辺国の君主が貢物を捧げ、これに対して皇帝側が恩賜を与える。周辺国が貢物を捧げることを進貢（しんこう）、皇帝がその貢物を受け入れることを入貢（にゅうこう）という。朝貢それ自体には政治的な臣属という意味はなく、冊封とは区別されている。

6.2 突厥国と羈縻

突厥国の配下部族の首領は、647 年に都督府の長官である都督や州の長官である刺史に任命されている。唐朝の官僚を都護とする燕然都護府の統制下に置かれていた。

突厥の可汗についても唐（隋）と突厥に父子（舅甥）関係や君臣関係があった。

冊封（さくほう）の根拠は『新唐書』「太宗紀」に太宗が「天可汗（てん）」と号したと記録されている。唐は、突厥・朝鮮・ヴェトナム等に対し冊封をとっていた。しかし、次

第にその支配力は弱まり、節度使が辺境防衛に当たるようになった。

唐3代皇帝高宗（在位 649～683）の晩期から則天武後の時代（7世紀末～8世紀初）、周辺諸民族が独立の気運を高めた。羈縻から離脱しはじめ羈縻は弱体化した。突厥国は7世紀末に唐から独立し、683年に突厥第2帝国が成立し744年に滅亡した。

7 黄蕨国と羈縻

古代中国皇帝が周辺諸国の君主と名目的君臣関係を結び、国際秩序が維持されていた。突厥国の東西分裂は583年である。分裂による混乱により黄蕨国へ渡来した。

突厥国への羈縻（きび）が、そのまま黄蕨国に持ち込まれたと考える。

- ① AD57年に**倭の奴国の王**が後漢・光武帝より「**漢倭奴国王**」の爵号を受ける。
後漢の建国者光武帝の末年「倭奴国王」が後漢に朝貢し印綬を賜った。「漢委奴国王印」が福岡県下志賀島から出土し、光武帝が「倭奴国王」に下賜した印綬である。
- ② AD107年「**倭国王帥升等**、後漢に生口百六十人を献じた」。『後漢書東夷伝』
安帝の永初元年（107年）、**倭国王帥升**（すいしょう）等が生口160人を献じ、謁見を請うてきた。これが帥升に関する史料の全てである。**生口**（せいこう）とは、弥生時代の倭国における捕虜・奴隷である。帥升が史上に現れる最古の人物であり、帥升の次に現れるのが卑弥呼である。
- ③ AD239年に**邪馬台国の卑弥呼**が、魏の首都洛陽に使者を派遣し、明帝から親魏倭王に任じられた。『三国志 魏書』
- ④ 南北朝時代に入り、**倭の五王**が南朝より冊封（さくほう）を受けた。この時代は**百済・新羅は倭の影響下**にあった。
5世紀の倭の五王による中国南朝への遣使の後、倭国から中国王朝への遣使は約120年間途絶した。復活は600年の遣隋使である。
- ⑤ 倭国は、600年に遣隋使を煬帝に送り、二回目の遣隋使は607年である。「日出處天子致書日没處天子無恙云云」（『隋書』卷八十一 列傳第四十六 東夷 倭國）で始まる国書を送った。
- ⑥ 唐使の高表仁が**倭国王**（『旧唐書』舒明天皇5年1月26日（633）「與王子爭禮 不宣朝命而還」）と礼を争い帰国した。
- ⑦ 白村江の戦いに敗れた倭国は、**大宝2年（702）第8次以降の遣唐使**により朝貢（ちょうこう）を再開した。
- ⑧ 唐の隆盛により冊封（さくほう）も安定期を迎え、冊封を通じて唐文化が伝達された。
- ⑨ 各国では唐の制度を模した律令制が採用された。

8 「イリ」の名前の付く歴代天皇

「イリ」の名前の付く歴代天皇が二人いる。日本の学術上、実在可能性が見込める初めての天皇である。第十代崇神（すじん）天皇の名前は御間城入彦五十瓊殖天皇（みまきいりびこいにえのすめらのみこと）。第十一代垂仁（すいにん）天皇は活目入彦五十狹茅尊（いくめいりびこいさちのみこと）である。騎馬民族の後裔であり記紀に豊富な伝承が記録されている。崇神10年に四道将軍を各地に派遣している。西道に派遣された四道将軍の一人が

「黄蕨津彦」である。伊利可汗（イリグカガン）が第十代崇神天皇、頡利可汗（イリカガン）が第十一代垂仁天皇と推定される。

9 突厥国と日本 先行研究

① 『騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ』江上波夫 昭和42年 中公新書 騎馬民族征服王朝説(騎馬民族日本征服論)

江上波夫氏が1948年に「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」シンポジウムで発表した仮説である。「日本における統一国家の出現と大和朝廷の創始が、東北アジアの夫余系騎馬民族の辰王朝によって、4世紀末ないし5世紀前半ごろに達成された」と推論している。

※ 江上波夫説では突厥国の記述無し。

② 『聖徳太子の正体』小林恵子^{やすこ} 1990 文芸春秋

『騎馬民族征服王朝説(江上波夫)の後継者』・岡山大学東洋史専攻の小林恵子^{やすこ}氏は、古代日本を東アジア史の中に位置づけ聖徳太子の出身地を西突厥国としている。随帝国成立の時代に、北方騎馬民族の中に台頭してきたのが大王達頭^{たつとう}である。達頭^{たつとう}はササン朝ペルシャ史料や、東ローマ帝国史料にたびたび登場する。随の煬帝や、北方騎馬民族内部に葛藤があり達頭^{たつとう}が日本に渡来した。そして、「聖徳太子は達頭その人だ」と断定している。大王達頭^{たつとう}とは、達頭可汗（玷厥、歩迦可汗、タルドゥカガン）(576～603)である。

※ 今回の黄蕨国の調査結果は小林恵子^{やすこ}説の一部を補説するものである。

③ 『古代出雲帝国の謎』武智鉄二 平成2年(1990) 祥伝社

「テュルク族(突厥国)の王は可汗^{カガン}、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」「テュルクの転化と考える他はない。」「福井、石川県にテュルク人が定住した」とする武智鉄二説である。

※ 突厥国からの渡來說、小林恵子^{やすこ}説、武智鉄二説が出版されたのが1990年である。武智鉄二説では突厥国の東西分裂583年以前から突厥国からの渡来ルートがあった。

④ 『騎馬民族がもたらした日本の言葉』東巖夫 2009 露満堂

「日本列島での漢字と古代テュルク語との出会い」より抜粋

日本列島は古い時代から漢字文化圏に属していた。日本社会では長い歴史を通じて、文字としての漢字と、音声としての古代テュルク語を併用するという、言語のよりよい伝達方法が求め続けられてきた。それは生物学の進化と同一過程である。そして、ついに漢字に、それと同じ意味を持つ国語(古代に伝来したテュルク語)の音声当てはめて読むという、訓読という表現形式が創造された。数千年という時の流れを経ても、なお、音声としてのテュルク語は日本語の音声の中軸となり、現代の日本語においても、その基本となり続けている。

⑤ 『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』松本秀男 1992年 日本放送出版協会

DNA による解析 「日本民族の源流は何処か」

松本秀雄氏は『日本民族の源流を考えると、日本人の Gm 遺伝子パターンの中でも、北方型の標識遺伝子である黄色の abst³ 遺伝子の流れに基づいて、「日本民族の基層をなす人々は北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけている。南方型蒙古系民族を特長づける赤の afbb^{1 3} 遺伝子の頻度は 10.6% であって、中国東北部の漢民族とも全く異質のものである。現在の日本人には依然として Gmabst³ 遺伝子が 26% の高さで保持されており、北方型蒙古系民族の特徴が明確に保持されている。日本人は、Gm 遺伝子の分布から見る限り、また ABO 遺伝子の分布からみても、アイヌと宮古の集団を除いて全土において等質である。

シベリアのバイカル湖畔のブリアート人は日本人と酷似している。日本民族は、北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にある。』と報告している。ロシアバイカル湖は突厥国にあった。人口の増加とともに、流れの豊かなアムール河を下って日本列島の地に到達することは、さほど困難なことではなかったのではないかと。

磯貝正雄氏は「中国地方、近畿地方の古墳集団は、縄文系対渡来系の仮想混血集団の混血率は 2 対 8、及び 1 対 9 に最も近い。渡来人が日本人形成に深く関与したのは確かなことである」と報告している。

⑥ 秦氏の故郷、弓月国

佐伯好郎氏（早稲田大学）は、秦氏の故郷・弓月国（クンユエ）は中央アジア天山山脈の北に位置しカザフスタンのバルハシ湖の南、イリ川付近にあったと報告している。

昔、この地はクルジア (Kuldja・弓月城) と呼ばれていた。現在でもシンチャンウイグル自治区の中に、クルジアと呼ばれる町がある。

⑦ 『陶山系譜』に備中古名『黄蕨』（キハラ）とのルビが有る。『兵庫県生産遺跡調査報告 第 5 冊 製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』に鉄の生産遺跡として「兵庫県宍粟郡波賀町原字キハラ」が収録されている。

『播磨国風土記』の穴禾郡雲箇里(うるか)の条に「波加の村 国占めましし時に、天日槍命(アメノヒボコ)、先に到りし処なり、伊和大神、後に到りたまふ」とある。「宍粟郡波賀町原字キハラ」は突蕨国バガ (587～588) 縁の地名である。天日槍命は突蕨国からの渡来人となる。

⑧ 「嘉字地名」の「嘉字」とは何か。

奈良時代に風土記の撰述に際して、和銅 6 年(713)に下された詔勅「郡、郷名を嘉字二字を以て示せ」がある。地名には縁起の良い字(嘉字)を当てよとの詔である。

柳田国男氏は『地名の研究』のなかで、「人間の行為であるとすれば、その趣旨や目的の無いはずはない」とし、先住民の縄文人がつけたか、アイヌ人がつけたか、または新たに侵入した渡来人がつけたにしても、地名をつけた目的が必ずあったとしている。

⑨ 「三王朝交替説」と「イリ王朝」

昭和 29 年 (1954)、水野祐氏(早稲田大学)が『増訂日本古代王朝史論序説』を発表。古

事記を分析した結果、崇神から推古に至る天皇がそれぞれ血統の異なる古・中・新の3王朝が交替していたのではないかとする説を立てた。水野祐説では、記紀の天皇の代数表記に合わせると、第10代の崇神天皇、第16代の仁徳天皇、第26代の継体天皇を初代とする3王朝の興廃があった。水野祐の学説は当時の学界で注目されたが賛同者は少なかった。

崇神王朝（三輪王朝）（イリ王朝）

崇神王朝は大和の三輪地方（三輪山麓）に本拠をおき三輪王朝ともよばれる。この王朝に属する天皇や皇族に「イリヒコ」「イリヒメ」など「イリ」のつく名称をもつ者が多く「イリ王朝」とよばれる。この名称はこの時期に限られている。崇神天皇の名はミマキイリヒコイニエ、垂仁天皇の名はイクメイリヒコイサチである。他にも崇神天皇の子でトヨキイリヒコ・トヨキイリヒメなどがいる。

※ 今回の黄蕨国の調査結果は水野 祐氏説を補説するものである。

⑩ 中沢護人氏は『技術的・文化的に見た鉄の歴史』で、「東アジアへの鉄文化の伝播を担ったのはウラル・アルタイ語族ではないか。ウラル・アルタイ語族こそは金属の民であり、鉄の民であり、金属の技術の伝播者ではなかったのか」と述べている。

⑪ 奥野正男氏は、「古墳時代に中国地方の内陸部に鍛冶の専門的集団が成立している。鉄生産地が中国山地のどこかに存在していた可能性を考えさせる」と述べている。

10 まとめ

① 「テュルクのカガン系譜」の5人のカガン(首長)名と岡山県内地名の一致を発見した。

② 突厥国の東西分裂は583年である。分裂による混乱により黄蕨国へ渡来したと考えた。突厥国の羈縻が黄蕨国に持ち込まれた。つまり、黄蕨国と表記された吉備国の語源は羈縻となる。奈良時代に風土記の撰述に際して、和銅6年(713)に下された詔勅「郡、郷名を嘉字二字を以て示せ」の目的の一つが羈縻を隠すためである。『先代旧事本紀大成経』のみが黄蕨国の正史である。

武智鉄二説では突厥国の東西分裂583年以前から突厥から倭国への渡来ルートがあった。同時に黄蕨国への渡来ルートも存在していた。

東巖夫氏は古代突厥語の研究成果として「日本人の源郷がバイカル湖であり、バイカル湖が突厥語の源郷である」と断定している。松本秀雄氏も、「日本民族の基層をなす人々は北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけている。シベリアのバイカル湖畔のブリアート人は日本人と酷似している。ロシアバイカル湖は突厥国である。人口の増加とともに、流れの豊かなアムール河を下って日本列島の地に到達することは、さほど困難なことではなかった。

③ 武智鉄二 敦賀説と同一事例

武智鉄二説「テュルク族(突厥国)の王は^{カカン}可汗、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」「テュルクの転化と考え

る他はない。」と同一事例が吉備(黄蕨)国にある。化氣神社である。越前敦賀・氣比神宮との関係である。化氣神社(岡山県加賀郡吉備中央町案田)の創建は養老年中(717~723)である。

越前敦賀・「氣比神宮」の「氣比(けひ)⇒化氣(けぎ)」、「比⇒化」と変化している。表記の変化は「歴史を隠す」ためと考える。



④ 柴狭(オサ)神社(備前国式内社・瀬戸町大内鍛冶屋)の祭神名に注目したい。



柴狭(オサ)神とは出身地である北狄(ホクテキ)を隠すためである。中華意識が台頭するに従い、北方にいた異民族は狄(テキ)と呼ばれ、一種の蔑称としての意味合いが強くなっていった。柴狭という漢字の中に北狄という字が隠されている。皇室関連地名、大内鵜居に諏訪神社

があり柴狭神社が「大社」にある。四十塚・鵜居で発見されている鉄滓(スラッグ)は古いと報告されている。

⑤ 大吉備津日子命(おおきびつひこ)、本来の名は彦五十狭芹彦命(ひこいさせりびこのみこと)であり、第十一代垂仁(すいにん)天皇は活目入彦五十狭茅尊(いくめいりびこいさちのみこと)である。二人の「狭」という漢字に「狄(テキ)」という漢字が隠されている。狭は「北狄(ホクテキ)からの渡来人」を意味している。

⑥ AD107年「倭国王帥升等、後漢に生口百六十人を献じた」の記録は『後漢書東夷伝』であり、AD239年に邪馬台国の卑弥呼が、魏の首都洛陽に使者を派遣し、明帝から親魏倭王に任じられた」との記録は『三国志 魏書』である。私は永初元年(107年)の倭国王帥升(すいしょう)と、邪馬台国卑弥呼も黄蕨国出身と推定している。何故、二人の名前のみが『後漢書東夷伝』『三国志 魏書』に記録されたかである。羈縻によるものと推定している。倭国で明確に羈縻(きび)が推定されるのは黄蕨国のみである。

松木武彦氏(岡山大学)は楯築墳丘墓の埋葬者を倭国王帥升と推定され、春成秀爾氏(国立歴史民俗博物館)は「女王卑弥呼は吉備出身か」と講演されている。

⑦ 水野 祐氏は「崇神天皇こそ最初の天皇」とし、崇神王朝の成立を200年頃、終末を362年としている。存続期間は170年弱である。しかし、今回「テュルクのカガン系譜」の発見により、イリク(552~553)、イリ(620~630)以後の崇神王朝成立となる。

⑧ 法隆寺の香木に焼き記された文字が、1986年東野治之氏の調査、吉田 豊氏(神戸市立外国語大学)によって突厥国のソグド語と特定された。法隆寺は607年建立であり法隆寺と突厥国との交流記録である。

⑨ 大和の語源「ヤマトウ」と大和山(吉備中央町)

クルジアのすぐ東南 50km 位のところ、イリ川上流に「ヤマトウ」という小さな村がある。中国人たちは「弓月」と言い、彼らは「ヤマトウ」と呼んでいた。「ヨセフ・アイデルバーグ氏説では、「ヤマトウ」が「やまと」の語源と指摘している。

岡山県加賀郡吉備中央町に大和山 608.4m がある。明治 22 年の市町村制施行で吉備郡大和村となる。大和山が語源である。秦氏が自らの故郷を偲ぶ名前を付けたと考える。山の名前は古い。渡来人は最初に見晴らしの良い山に登り、安全を確認し、平野におりる。これが天下るの意味である。

11 謝辞

『陶山系譜』(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)の「黄^{すやま}蕨」の調査を大井 透氏(香川県坂出市)から依頼されたのは平成20年8月5日である。「黄^{すやま}蕨」の「蕨」は蕨と月と欠が異なっており異体字と考えた。

平成22年2月7日の「とっとり発! 弥生文化シンポジウム とっとり倭人伝 吉備と山陰の弥生社会」での西谷 正氏(九州歴史資料館館長)の記念講演「倭人伝を紐解く」の中に、「鳥取県西伯郡の古名が汗入郡」との話があった。難波俊成先生(就実大学)から「岡山にも汗入がある。岡山中学・高校のバス停の地名」と教示された。岡山児島線 汗入交差点である。この研究は難波俊成先生の「岡山にも汗入がある」との教示から本格的に再スタートした。イリ王朝の重要性と「福井、石川県にテュルク人が定住した」とする武智鉄二説を教示いただいた野崎 豊先生(神道考古学・神社考古学)に深く感謝致します。

12 これまでの中間報告

①『吉備国の語源・黄蕨について』

吉備学会 丸谷憲二 平成 20 年 8 月 24 日 『吉備とはなんぞや』岡山県立博物館講堂

『きび考 創刊号』平成 22 年 7 月寄稿

②『突厥国からの渡来者集団が建国』

吉備学会 丸谷憲二 平成 20 年 10 月 26 日 岡山県立博物館講堂

『きび考 第 2 号』平成 22 年 10 月寄稿

③『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』

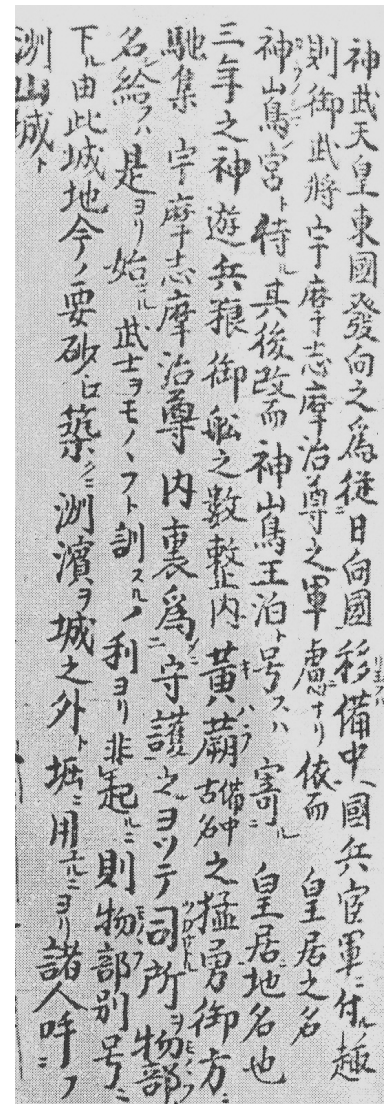
吉備学会 丸谷憲二 平成 20 年 12 月 13 日 ピュアリティ まきび

『きび考 第 4 号』平成 23 年 07 月寄稿

④『吉備(黄蕨)国の元伊勢・伊勢宮・名方浜宮の考察』

吉備学会 丸谷憲二 平成 21 年 8 月 29 日 岡山県立博物館講堂

⑤ 吉備国の語源『黄蕨』と羈縻(きび)政策 『熊山遺跡出土品』の考察



講演記録 丸谷憲二

平成 22 年 3 月 20 日 岡山市瀬戸公民館「瀬戸町の文化財を語る会」

平成 22 年 6 月 19 日 備前市伊里公民館「日本先史古代研究会」

平成 22 年 7 月 24 日 赤磐市熊山町中央公民館「熊山遺跡群調査研究会」

平成 23 年 1 月 16 日 倉敷市玉島図書館「玉島歴史研究会」

高句麗会 平成 22 年 4 月付論文収録

吉備国語源黄蕨羈縻()政策 - 豆丁网 平成 22 年 4 月付論文収録

<http://www.docin.com/p-123965904.html> 収録

13 参考文献

吉備国の語源・黄蕨

①『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』小笠原春夫 平成 11 年 神道体系編集会

②『先代旧事本紀・新訂増補 国史大系 7』昭和 41 年 吉川弘文館

③『古代物部氏と先代旧事本紀の謎』安本美典 平成 15 年 勉誠出版

④『謎の根本聖典・先代旧事本紀大成経』後藤 隆 2004 年 徳間書店

⑤『地名の研究』柳田国男 1968 年 角川文庫 角川書店

⑥『増訂日本古代王朝史論序説』水野 祐 昭和 29 年(1954 年)小宮山書店

⑦『日本古代の国家形成』水野 祐 昭和 42 年 講談社

とっけつ 突蕨国と羈縻

①『東洋文庫 223 騎馬民族史 2 正史北狄伝』山口信夫他 訳注 昭和 47 年 平凡社

②『世界の歴史⑩ 草原とオアシス』山田信夫 昭和 60 年 講談社

③『聖徳太子の正体』小林恵子^{やすこ} 1990 年 文芸春秋

④『古代出雲帝国の謎』武智鉄二 平成 2 年 祥伝社

⑤ 歴史学叢書『隋唐の国際秩序と東アジア』金子修一 2001 年 名著刊行会

⑥ とっとり発弥生文化シンポジウム『とっとり倭人伝』2008 年 鳥取県文化財保存協会

⑦「日随関係と国書」『改訂 日本古代史新講』梅村 喬 2004 年 梓出版

⑧「冊封体制と朝鮮半島からの文化」『日本古代史を学ぶ』大津 透 2009 年 岩波書店

⑨「唐初の対外関係」『中国史概説』熊本 崇 1998 年 白帝社

⑩「倭国の成立と吉備」松本武彦『邪馬台国の時代』平成 24 年 10 月 岡山県立博物館

鋳物・鋳造・鉄

①「吉備中心部の鉄事情」『吉備の弥生集落』柳瀬昭彦 2007 年 吉備人出版

②『兵庫県生産遺跡調査報告 第 5 冊 製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』1997 年 兵庫県教育委員会

③『鉄の古代史 2 古墳時代』奥野正男 1994 年 白水社

④『鉄の古代史 3 騎馬文化』奥野正男 2000 年 白水社

大歳在乙卯、三月甲寅朔己未、從入黃蕨國、起行宮居御、是曰高島宮、積三年間、而楯舟楫蓄兵食也、將欲以一舉而平天下也、大己貴尊兒木勝彥命神、又黃蕨津彥命、爲國首在國頭見天孫、作敬與兒國君命、奉饗奉事、自造陳具、集兵調陳、進奉皇軍、于時行宮庭一夜生八蕨、其長一丈二尺、其太二尺五寸、甚色濃黃、國有入神、云黃光命、即朝奏曰、此草異草也、當治八洲祥、是天爲瑞、軍卒競之、故道此國號黃蕨國、

関連項目

- ①『バルハシ湖・イリ川』フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- ② 「柴狭神社」『瀬戸町史』昭和 60 年 瀬戸町史編纂委員会 瀬戸町
- ③ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- ④ 『大和村誌』堀口正志 昭和 50 年 大和公民館